

## アトモスフィア

## 老研究者の杞憂

吉田光昭\*

歳を重ねたせいだろう、大型研究の事後評価に駆出されることが間々ある。その度に思うことがある。「事後評価の意味は何か」と共に、「研究は、選ばれた研究者には好きにやっていただくのが最善である」と。ただし、これには優れた研究者と課題を選ぶことが前提である。この「優れた」と言う前提が容易でない。将来における課題の重要性と成就の可能性に正解はないからである。と言っても、多数決などはもってのほかである。「目利き」による独断と偏見しかないかと思ってもみるが、闇の中で目利きされても困る。選択には透明性が必要である。批判を受けつける体制は改善につながると思っているが、事後評価は改善に役立っているのだろうか。

研究が、豊かな資源のもと、大きな自由裁量の中で行えるようになれば良いのだが、世の中は逆に進んでいるようだ。流れは社会的に一般的な風潮の様でもあるが、研究者が余り信用されていないことの反映かも知れない。虚偽の論文や不正経理はごく一部の研究者によるものであるが、研究者集団としては、研究者倫理を見直し、分りやすい形で身を正すことは当然であろう。問題は、このようなことが影響して、研究体制に疑念が持たれ、使用制限が過剰になり、挙句の果てに縮小されるのではないかという懸念である。倫理的に問題がなければそれで良いという問題ではなく、研究成果を出すことが重要なのである。

ゲノム解析がもたらす情報の洪水、技術開発のラッシュは、とっくの昔に個人の守備範囲を大きく超え、「研究は個人で行うものである」などと言っている時代ではなくなった。研究者連携と研究基盤整備が叫ばれる理由であり、組織としての対応が求められている。研究資源に関しても新しい連携と共有を組織的に検討し、組織改革を進めなければ、研究の有効な展開は期待できない。改めてこんなことを言う必要もないほど、とっくに言い尽くされたことである。にもかかわらず充分に対応が進んでいるとは思われない。何故だろうか。

そこに、研究者のエゴが介在していないだろうか。大学教授や研究部長を、旅館の客になぞらえた話がある。客のくせに投宿している部屋を自分のもののように思っている。そのわりには旅館のことを考えようと思わないのは心得違いであると。自己中に陥って全体のことを意識しない振る舞いなどは極めて品がない。旅館と違い大学や研究所には、さらにややこしい事情がある。教授や部長は客であり、同時に運営（経営）担当者でもあるということである。さらに難題なのは、運営判断の「物差し」が共有されないことにある。例えば、研究の目的は多種多様で、真の価値は1~2年と言う短い時間では測ることが出来ないだけでなく、研究の自由の名の下に多様性が重要視され、上下・優劣は余程でないとは共有されない。運営（経営）者がこれを盾にすると、結果は意識せざるにお手盛りとなり、改革は骨抜きとなり、牛歩となる。このような状況に大きな投資は、期待できない。研究者として生きてきた私は、この構造を良く理解し尤もであると思うが、一方で、研究者のエゴのようにも感じる。少なくとも、社会を納得させ、大型の資源を投じるようにするには、説得力に欠ける。

個人の守備範囲を超えた研究環境にいて、効果的に研究を進め生き抜いてゆくためには、誰かが行うかもしれない研究基盤整備を漫然と待つのではなく、自らの組織を効果的な研究用に変革すべきである。全てを一手にではなく、特徴ある方向性への再編成が期待される。これには連携が必須となる。法人だからこそ可能になった多様性の追及である。「改革とは現在を捨てることである」と言う言葉があるが、何かを捨て、新しい挑戦を始めなければ生残れない瀬戸際に来ている。捨てる中には自分も含まれる厳しさを容認するだけの「知性」を持たなければ、エゴのそしりは免れないのではなからうか。個性ある組織が多様性を持って整備されるとなれば、我が国全体としても良いことにつながるであろう。諺に「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」とある。組織の生残りが懸かる「捨てる決心」と思っている。「決心」に待ったはないようであるが、大学と研究所の研究者の知性に大いに期待している、そろそろ始まると。

\*公益財団法人 がん研究会がん化学療法センター